

らない。国家を作るといってもそう簡単にできるものではなく、また、ちゃんと機能する国家をつくるなんて、とても、難しいと思った。子どもたちや女性たちのために学校を作ったり食料を与えることもしくはならない。



シンポジウムでのパネリスト

緒方貞子氏の講演は深い感銘をあたえました。

普段自分たちが当たり前のようになっている行動、「水を飲むこと」「学校へ行くこと」...そういうことが困難な人々がいること、平和な場所でも安心して勉強ができるということは奇跡といってもよいことといった感想に続き、僕らが出来たことはアフガンについてもっと詳しくなること、小さなことでもアフガンのためになることをしたい、とあります（附属中学校ホームページから）。

私たちは、女性、子ども、共生をこれからの世界の重要なキーワードであると考えています。まさに、女子教育なくして社会の将来はない、と考える五女子大学コンソシアムはアフガン復興の支援の中心に女子教育を据えています。私たちの国も、百年前は次のようでした。「ここに群がる子どもたちは親たちと同じように虫に喰われ、税金のために貧窮の生活を送るであらう」（イサベラ・バード『日本奥地紀行』一八八〇年）。

昭和二十四年の行啓以来なかったことでしたが、皇后陛下をお迎えしての「緒方貞子氏名誉博士称号授与・アフガニスタン女子教育支援シンポジウム記念レセプション」は、このように考えると大変有意義なことでした。

地上の星たち

理学部生物学科教授 最上 善広

二〇〇三年の幕開けとともに、新堀真希さん（大学院・ライフサイエンス専攻一年）が宇宙での夢の実現に踏み出しました。新堀さんは、宇宙微小重力でのメダカの稚魚の遊泳と、帰還後の地球重力への順応過程を研究するために、NASAが主催した学生向けの宇宙実験プログラム（STARS）に参加しています。一月十六日（現地時間）に打ち上げられたスペースシャトルは約二週間の飛行後に地上に帰ってきます（この文章を書いている時点では、実験はまだ完結していません）。

日本人の宇宙飛行士が誕生してから、宇宙が多少は身近になったとは言え、まだまだ遙か彼方の世界というのが宇宙に対する一般的な感覚です。しかし、宇宙飛行士にならずとも、宇宙

環境のコーナーとして実験に参加することで、宇宙へ近づけることが出来ます。



新堀さんとフライト装置

新堀さん以外にも、宇宙実験経験者もしくは宇宙実験を目指して準備中のお茶の水女子大学（以降「本学」または「お茶大」と表記）関係者が大勢います。ここではその人たちの紹介をしましょう。

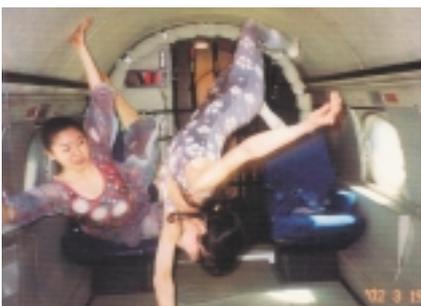
初めは黒谷明美さん。本学生物学科の卒業生で、現在は宇宙科学研究所の助教授です。日本の宇宙生物実験のパイオニアとして、TBSの宇宙特派員と一緒にアマガエルを宇宙に送り出した実験を皮切りに、向井千秋さんと一緒にスペースシャトルでのイモリの産卵と発生の実験も行っています。現在も館山の本学理学部附属臨海実験所と共同で、宇宙でのミネラル代謝を調べる実験を計画中です。

次は、石川島播磨重工業主任研究員の内田美佐子さん。本学物理学科の出身で、材料科学のスペシャリストです。内田さんはMSL・1ミッションで、材料実験の主任研究員として紅一点、ミッションの重要ポストを勤められました。その後も、ロケットの弾道飛行を使った微小重力実験などで大活躍です。

異色は、石黒節子先生。表象芸術論の立場から、宇宙微小重力を利用しようとなさっています。天女の舞の美しさ

は、重力からはじめて実現される、そんな先生のお考えが実行に移されるのも遠くはないでしょう。

また、本学化学科の森義



航空機を使った微小重力中での舞い実験

仁先生は、落下塔や飛行機を使い、化学反応への微小重力の作用を調べています。さらに、筆者も、宇宙滞在での寿命の変動を調べるための実験を準備中です。これらの研究は学生さんたちを巻き込んで進行中です。地上の星はお茶大のキャンパスで誕生しつつあります。その中からきつと近い将来、宇宙で輝く人たちが現れることを期待しています。

追伸

既にご存知の様に、現地時間で二〇〇三年二月一日午前九時頃、スペースシャトル・コロンビア号が帰還の為の大気圏突入時に、惨劇が起きてしまいました。宇宙実験の成功の報告ができなくなりました。とても残念です。新堀さんはこの悲しみにもくじけず、サイエンティストとして活動を続けるとのことです。犠牲者となられた乗組員の皆様のご冥福を心からお祈りいたします。

(編集室 福島)

COE拠点 発達心理学研究室

内田 伸子

人間文化研究科教授
COE拠点リーダー

COEの課題：

今日、子どもの発達、子育てや教育の問題は深刻さを増しています。児童虐待、育児不安、学級崩壊など学校には様々な病理が現れ、子どもの学習時間の減少と学力低下の懸念など、これからの日本の担い手となる子どもたちの育ちと学びに危機が生じております。

青年期にあつてはフリーターが急増し、なかなか一人前になれないモラトリアム期間が

延長して社会問題化しております。更に、長寿化による中高年期の長期化に伴い人は従来のライフコースモデルでは対処しにくい様々な生活上の問題に遭遇することになります。

これらの深刻な問題に適切な診断と処方箋を与えるためには長期的なライフスパンの視点に立ち欧米・強者型「発達」概念を脱構築することにより社会的な要因と絡めて危機的移行を説明しなくてはなりません。この



物語理解の実験場面

を担います。

発達心理学研究室の研究テーマ：

発達心理学研究室は、修士・博士の院生やPD、大学院研究生等二〇余名からなる大所帯です。言語と認識の諸問題をめぐる様々な実験研究や観察研究が進行しております。構成員の研究テーマをご紹介しますと、いかにも発達心理学らしい乳幼児の母子相互作用や育児不安、コミュニケーション能力の発達から中高年期や老年期の学習動機づけ、さらに認知科学の方法論を適用しての推論やジェスチャーの基礎メカニズムの解明、文章理解・

意図から「誕生から死までの人間発達科学生涯発達追跡センタ」の構築されました。発達心理学研究室もこの拠点事業推進の一翼

作文産出の情報処理過程から教育実践と結びついた教授学習過程、早期教育の認知発達に及ぼす影響の解明など基礎から応用まで多岐にわたっています。

研究指導が全てうまくいったとしても、院生がこれについてきてくれなくてはダメ。私に出来ることはたかが知れています。結局は院生一人一人の努力にかかっているのです。

数学科の藤原正彦教授があげておられる数学者として成功する四条件「①知的好奇心は旺盛であれ、②野心的であれ、③執拗であれ、④楽天的であれ」は心理学者として成功する条件にも当てはまります。私は幸いにしてこの四条件を備えた、優秀、且つ、勤勉な院生に恵まれて参りました。さらに、箕浦康子教授(文化)、内藤俊史教授(教育)、石口 彰教授(認知)、坂元章助教授(社会)、菅原ますみ助教授(発達精神病理学)など、勢いのある指導陣との共同指導体制に加えて、他の研究室の院生たちとの活発な研究交流による切磋琢磨の雰囲気、世界に先駆けた知見をもたらず

ような秀逸な研究を創発させる土壌となり、「学会誌にお茶大院生の名前が見えたらぬ号はないね」(他大学の心理学者の



コミュニケーション能力の発達についての実験場面

評)というような実績につながっているもの
と思われる。

女性研究者を育てる:

研究者として生きるためには大学や研究所のポストを得なくてはなりません。四年制大学の女性教員の割合は領域によっても凹凸があります。家政学分野は女性教員の割合が三三%で最も高率ですが、医学や法学分野では二、三%と驚くほど低いのです。私の所属する心理学界では五〇代、四〇代、三〇代と年代が下がるにつれて女性教員の割合は十一、十四、十九%と高くなります。ところが学会誌での女性の著者の割合は心理学会が組織されて以来常に三割を占めております。女性の就労率と学会誌での女性の著者の割合とを単純に比較することはできないものの、このアンバランスは研究に従事していても就職できない女性が多いという状況を窺わせるものです。優れた研究・教育能力が期待される人々が、女性というだけで切られていく現状はなんとか打開しなくてはなりません。お茶の水女子大学はその推進力になれるはず。人間発達科学専攻(定員十五名)の過去五年間の教育実績は、博士学位授与数 課程博士二十八名、論文博士二〇名、学術雑誌掲載論文数は二六六本、そのうち学会賞獲得数は十六本。大学改組や短大の四大化の傾向に後押しされ、発達研究者の就職はきわめて良好で、修了者全員を四年制大学に就職させることができました。

COEに採択されて真つ先に取り組んだのは経済的に最も苦しい状況にある院生の研究



ゼミでの研究発表の指導風景

生活を支援すること。すなわちRA枠を拡大し、公募研究により院生の研究助成や海外派遣、留学院生の研究支援のしくみを作ることでした。昨年一〇月よりRAとして二〇名を

採用し、公募研究に応募した五一名の中から厳正な三段階審査を経て採用された二〇名に研究助成をしております。新年度も新たに研究を公募し、助成をして参ります。このような状況変化は、教員だけではなく、院生の志気を高め、研究が活性化されつつあるという確かな手応えを感じさせてくれます。この実感を支えにして、これまで以上に、頼りになる、任せておける女性研究者を育てていきたいと考えております。

「SPP」サイエンスパートナーシッププログラム事業紹介

理学部助教・学長補佐 千葉 和義

もう何時間も記録計の針は、ゼロを指したままです。いつの間にか暗くなった実験室の片隅で、やめて帰れば良いのにこさんは粘っています。突然、針がぴくりと動いたような気がしました。息をするのも忘れて見詰めるうちに、ますます針は大きく動き始めました。気持ちの昂りを処理しきれないこさんは、阿波踊りのように体をくねらせ、その喜びを表現したのでした。

このように理科実験では、二cmほどのちつ



SPP 遺伝子判定研修の現場職員

ばけな針がほんのわずかに動くだけで、映画のラストシーンに匹敵するほどの感動が得られるのです(頻度は少ないですが)。しかし不思議なことに、このような研究からもたらされた発見は、一旦教科書の中に組み込まれると、何か難しい、分かりにくい、眠気を催す記載に化けてしまいます。実験から湧き出てくる感動を知らない子供達が、「理科離れ」するのも、仕方ないのです。それではいけないと文部科学省では、平成十四年度より「サイエンス・パートナーシップ・プログラム事業」(以下、「SPP事業」という)を開始しました。これは、大学の研究者が中学校や高等学校の生徒や先生を対象に、先進的な科学技術・理科、数学教育等を実施するという試みです。特に理数科の先生に対する授業(教員研修)には、大学の社会貢献という意義も込められています。

本理学部と附属臨海実験所は、早速教育委員会や高校(東京都教員研修センター、千葉県総合教育センター、群馬県教育委員会や、高崎女子高校、都立両国高校、森村学園、県立船橋高校、筑波大附属盲学校など)と連携して、SPP事業に取り組みました。十四年度に実施されたテーマは、生物学分野十六件、化学分野五件、物理学分野二件、数学・情報科学分野二件です。それぞれ、一〜三日にわたり実験や講義を一〇〜三